

『蒙古字韻』と『五音集韻』

中村雅之

(富山大学)

The Menggu-Ziyun (蒙古字韻 abbr. MZ) has not been regarded as more important material for the phonological study of Old Mandarin than the Zhongyuan-Yinyun (中原音韻), although it is actually worthwhile. The reason is that the voiced initials seem to be preserved in the MZ and that it would be possible to consider the MZ to be reflection of the Southern dialect, not of the Old Mandarin.

With regard to the problem, a different point of view will be given in this paper, especially by reference to the Wuyin-Jiyun (五音集韻 abbr. WJ). We have sufficient reason to assert that the WJ played an important role when the MZ was compiled. Between the MZ and the WJ, there are striking similarities as follows:

- i) Syllables are arranged in order of their initials, starting with the jianmu (見母) initial and ending with the rimu (日母) initial.
- ii) The characters “夢, 目, 謀 etc.” have the weimu (微母) initial.
- iii) The arrangement of characters is very similar to each other.

If the explanation is convincing that the MZ inherited many things from the WJ, it would be possible that the category of the voiced initials in the MZ is also a part of the inheritance from the WJ.

1. はじめに
2. 小韻の配列
3. 微母の扱い — 「夢 wuŋ」・「目 wu」・「謀 wuw」
4. 収録字の配列
5. おわりに

1. はじめに

元代の『蒙古字韻』は表音文字であるパスパ字の表記を伴う点で近世音研究にとって欠かせない音韻資料でありながら、その成立に関する事情はほとんど知られていない。服部四郎 1946 は『蒙古字韻』と熊忠『古今韻会举要』(1297)の音韻体系が細部にわたって一致することから、両書がともに今はなき黄公紹『古今韻会』によったものであろうと推論した。しかし、この論は甚だ論拠にとぼしいものであって、種々の状況から判断するならば、むしろ

『古今韻會舉要』(ないし『古今韻會』)の方がパスパ字表記を利用したのであり、その結果『蒙古字韻』との間に多くの一致を生じたものと結論せざるを得ない。¹⁾したがって、『蒙古字韻』がいかんにして成立したかという問題については、依然として何らの解答も与えられていない状態である。

Cheng1985のように、『蒙古字韻』の基づいた言語が北方官話であるという見方がある一方で、服部四郎1946やNakano1971のように南方方言と結びつける試みもある。所拠方言が不明確であることが、同時代の『中原音韻』(1324)ほど重要な研究対象とされなかった一因でもあろう。その意味で、『蒙古字韻』の成立事情を幾分なりとも明らかにすることは、音韻資料としての『蒙古字韻』の価値をさらに高めるものと思われる。

『蒙古字韻』は一東から十五麻にいたる15の韻部に分類されており、それまでの伝統的な韻書と大きく異なっている。これは『蒙古字韻』の目的が押韻の規範を示すためというより、当時の国字であるパスパ字の綴りを知らしめることにあったからなのではないかと推測される。フビライ帝がパスパ(八思巴)に命じて作成させたパスパ字(1269年公布)は形態的にも構造的にもチベット文字の変形と言うべきものであるが、漢語の各音節を記す場合の綴りはかなり複雑である。そこで、『蒙古字韻』のように漢語の全音節にパスパ字を付し、その綴りを一覧できる字書が必要とされたのであろう。その際、何の材料も用いずに漢語の全音節をリストアップするのは容易ではないから、伝統的な何らかの韻書を参考にした可能性が考えられる。『蒙古字韻』がまがりなりにも韻書の形式を保っていることも、その可能性を示唆する。そこで、いくつかの韻書について『蒙古字韻』との比較検討を試みたところ、とりわけ金の韓道昭『五音集韻』(1212)との間に種々の点で興味深い一致を見出した。『蒙古字韻』の成立に『五音集韻』が深く関わっているのではないかと思われるので、ここに報告する次第である。

なお、『蒙古字韻』は二種の影印本(関西大学東西学術研究所1956および照那斯図・楊耐思1987)により、『五音集韻』は東洋文庫蔵の元至元己丑(1289)刊本による。

2. 小韻の配列

『五音集韻』が『広韻』と『集韻』を材料として構成されていることは既に『四庫提要』に指摘がある。しかし、『五音集韻』には『広韻』や『集韻』にはない特徴がいくつか見られる。その1は分韻に手を加えて160韻としたこと、その2は各韻における小韻の配列順序を固定したこと、その3は各小韻に36字母と等位を記したことである。第3点は、要するに韻書の中に韻図の情報を明示したものと理解される。

『五音集韻』における小韻の配列は以下の通りであり、見母に始まり、日母に終わる。

- 牙音(見溪群疑)
- 舌頭音(端透定泥)
- 舌上音(知徹澄娘)
- 重唇音(幫滂並明)

軽唇音(非敷奉微)
 齒頭音(精清從心邪)
 正齒音(照穿牀審禪)
 喉音(曉匣影喻)
 半舌音(來)
 半齒音(日)

この配列は韻図の『四声等子』や『経史正音切韻指南』と同じで、『韻鏡』や『七音略』の唇音・舌音・牙音・齒音・喉音・半舌音・半齒音という配列と大きく異なる。したがって、『五音集韻』のよった韻図は『四声等子』や『経史正音切韻指南』に近い形式のものであったと言える。また、見母に始まり、日母に終わるという点では、『切韻指掌図』や『古今韻会举要』における配列も同様であるが、喉音の中の順次が「影曉匣喻」である点が『五音集韻』と異っている。

一方、『蒙古字韻』における各韻の配列は、まず同一韻母をもつ音節をまとめ、その中は声母順に以下のような配列になっている。パスパ字によって記される綴りの語頭子音と相当する 36 字母を示す(パスパ字は服部 1946 の転写法によってローマ字転写する。以下同)。

牙音 (g 見, k' 溪, k 群, ŋ 疑喻)
 舌頭音 (d 端, t' 透, t 定, n 泥)
 舌上音 (dʒ 知照, tʃ' 徹穿, tʃ 澄牀, ŋ 娘)
 重唇音 (b 幫, p' 滂, p 並, m 明)
 軽唇音 (hǔ 非敷, fǔ 奉, w 微)
 齒頭音 (dz 精, ts' 清, ts 從, s 心, z 邪)
 正齒音 (ʃ 審, ʒ 禪)
 喉音 (h 曉, fi・γ 匣, ' 影, ' 喻疑, y 影, j 喻疑)
 半舌音 (l 來)
 半齒音 (z 日)

『蒙古字韻』の体系では、知・徹・澄はそれぞれ照・穿・牀と合流して、dʒ, tʃ', tʃ の一列になっている。非母と敷母も同様である。匣母については、直音では γ, 拗音では fi という使い分けがある。影母は開口の 2 等と 4 等および合口 4 等で y, それ以外では'である。また疑母と喻母にあらわれる ŋ と'と j は補い合う分布をなし、以下のような複雑な状況にある。

	開口	合口
1 等	ŋ	' (or ゼロ表記)
2 等	j	'
3 等	ŋ	'
4 等	j	j

『蒙古字韻』における以上のような状況を考慮するならば、『蒙古字韻』の基本的な配列

は『五音集韻』と一致していると思なすことができる。²⁾

3. 微母の扱い—「夢 wuŋ」・「目 wu」・「謀 wuw」

『蒙古字韻』のパスパ字表記の中で興味を引く問題のひとつは、東送屋尤の各韻(韻目は『広韻』による)に由来する文字の中に微母相当の綴りがあらわれることである。

唐代初期の音韻変化のひとつに、幫滂並明から非敷奉微が分化する「軽唇音化」がある。軽唇音化は、平山久雄 1967 によれば、「韻母が介音/-i-/を含み、かつ奥舌主母音(/ɑ, ʌ/)を含むとき”その韻母と結合する唇音声母に生じた変化」であるが、平山氏も指摘するように、現代諸方言への反映から見ると、東送屋尤の各韻における明母のみは、その条件下にもかかわらず例外的に軽唇音化を生じなかった。例えば、送韻「夢」、屋韻「目」、尤韻「謀」の現代諸方言における状況を、軽唇音化を生じた例(仮に陽韻「亡」を挙げてみた)とともに、『漢語方音字彙』(第2版)から抜き出してみると、以下の通りである。(声調は省略)

	夢	目	謀	亡
北京	məŋ	mu	mou	uaŋ
濟南	məŋ	mu	mu	uaŋ
西安	məŋ	mu	mu	vaŋ
太原	məŋ	məʔ	mu	vɔ̃
武漢	moŋ	moŋ	mou 文 moŋ 白	uaŋ
成都	moŋ	mu	moŋ	uaŋ
合肥	məŋ	məʔ	mɔ	uã
揚州	moŋ	mɔʔ	mo	uaŋ
蘇州	moŋ	moʔ	mɻ	vɔŋ 文 mɔŋ 白
温州	moŋ	mo/mu	mɜ	ɦuɔ
長沙	mən	mo	məu	uan
双峰	man	mɔ	me	ɔŋ
南昌	muŋ	muk	mɛu	uɔŋ
梅県	muŋ	muk	mɛu	mɔŋ
広州	mɔŋ	mɔk	mɛu	mɔŋ
陽江	mɔŋ	mɔk	mɛu	mɔŋ
厦門	bɔŋ 文 baŋ 白	bɔk 文 bak 白	bɔ	bɔŋ
潮州	maŋ	mak	mɔ̃/moŋ	buaŋ
福州	mouŋ 文 mœyŋ 白	muʔ 文 mɔyʔ 白	mɛu	uɔŋ

建甌 moŋ mu me uaŋ

このように、現代諸方言においては、「夢」「目」「謀」に軽唇音化の形跡は見えない。ところが『蒙古字韻』のパスパ字による綴りでは、これらの例も他の微母字と同様に w-で記されているのである。すなわち、「夢夢夢」(以上『広韻』の東韻)と「寤夢夢」(送韻)がいずれも wuŋ, 「目睦穆牧繆」(屋韻)が wu, 「謀眸牟侷矛鏊麤蠹」(尤韻)が wuw と綴られる。³⁾ 上に見た現代諸方言の状況, さらに『切韻指掌圖』でこれらの音節が微母ではなく明母に配される⁴⁾ ことなどを考慮するならば、『蒙古字韻』における状況はいささか特異なものと言えそうである。

そして、『蒙古字韻』と同様の状況を示している数少ない(あるいは唯一の?) 資料が「五音集韻」である。『五音集韻』においては、問題の小韻が全て微母に帰属している。小韻の配列に加えて、この点でも、『蒙古字韻』と『五音集韻』とが一致を示すことは意味深長であると言わねばならない。

4. 収録字の配列

『蒙古字韻』がその成立に際して、もし『五音集韻』を利用していたとするならば、収録字の配列に関しても両書の間にも一定の類似が見られと予想される。とはいえ、『蒙古字韻』に関しては、現存する唯一の伝本である大英図書館蔵の写本が、尾崎雄二郎 1962 の考証によって清乾隆年間の筆写になることが知られており、必ずしも原本『蒙古字韻』の内容をそのまま伝えているとは限らない。特に収録字の増加は他の韻書でも頻繁に行われるところであり、我々の用いる『蒙古字韻』写本がそのような増補を蒙っている可能性は当然考慮しておかねばならない。幸いなことに、最近になってこの分野に関する画期的な研究が発表された。吉池孝一 1993 である。吉池氏の研究は、本稿の以下の作業の前提とするところでもあるので、まずその概要を紹介しておきたい。

吉池氏によれば、現存の『蒙古字韻』写本は複数の増字の層をもつ可能性があるが、そのうちのひとつの層については明確に識別することができる。すなわち、義注の付されている字はすべて増加字である。現存写本の収録字はほとんどの場合、ただ羅列されるだけで義注をもたないのであるが、100 例あまり義注の付されているものがある。そして、「廻避字様」⁵⁾ の後に「今添諸韻収不盡漢字、韻内細解者、並係新添。」と記されるその「細解」とは義注を指すと思われること、さらに義注の付された字の中には、その出現位置によって増加字と半断できる例が多くあることから、義注付きの字は増加字であると結論される。⁶⁾ したがって、収録字の中からはとりあえず義注付きのものを除外することによって、原本『蒙古字韻』に一步近づくことができるわけである。

収録字の配列に関して『蒙古字韻』と他資料とを比較する場合、増加字のあることを考慮せずに作業をおこなってしまうと十分な結果が得られないことになりかねない。それ故、明確な基準で増加字を選別できることは重要な意味をもつ。

いま、『蒙古字韻』の一東の部の最初の音節について具体的に検討してみよう。そこには

まずバスパ字で **guŋ** と記され、その下に平声の「公功工攻觥觥肱𠂔𠂔」9字、上声の「礦鑛」2字、去声の「貢贛𠂔瀨虹墳鵲⁷⁾」7字が収録されている。このうち平声の「𠂔𠂔」と去声の「𠂔」が義注の付されている字である。試みに『五音集韻』のみならず、宋金元の以下の諸資料と収録字の配列を比較することにする。

- a. 『広韻』（北京市中国書店影印沢存堂本）
- b. 『集韻』（中華書局影印北京図書館蔵宋刻本）
- c. 『附積文互註礼部韻略』（四部叢刊続編所収本）
- d. 『増修互註礼部韻略』（四庫全書所収本）
- e. 『増修校正押韻積疑』（四庫全書所収本）
- f. 『古今韻会举要』（内閣文庫蔵本）
- g. 『五音集韻』（東洋文庫蔵元刻本）

説明の便宜上、去声の収録字から検討する。去声の7字は諸資料においていずれも送韻の貢小韻に属するが、その小韻内における出現順位は以下の通りである。字が収録されていない場合は×と記し、『蒙古字韻』で義注の付された「𠂔」字の順位は[]でくくった。

	貢	贛	𠂔	瀨	虹	墳	鵲
a.	1	2	[5]	×	4	×	×
b.	1	2	[14]	5	13	10	11
c.	1	2	[5]	3	×	×	×
d.	1	2	[7]	3	8	×	×
e.	1	2	[5]	3	×	×	×
f.	1	2	[8]	3	7	5	6
g.	1	2	[7]	5	6	14	15

義注の付された「𠂔」を増加字として除外すると、他の収録字が『蒙古字韻』と同じ順番で相前後せずに現れるのはgの『五音集韻』のみである。すなわち、原本『蒙古字韻』は『五音集韻』の送韻貢小韻の中から「貢贛瀨虹墳鵲」の6文字を選び、その相対的順位を崩さずに収録したと考えて矛盾がない。一方、他の資料では字が収録されていなかったり、順位が前後するなど、『蒙古字韻』とは完全には一致しない。この場合、義注の付されている「𠂔」を増加字として除外できることが、この作業を有効なものとしているのである。その意味で本稿が吉池論文に負うところは大きい。

次に上声の「礦鑛」2字の検討に移る。この2字は諸資料において梗韻礦小韻に見えるが、同様の作業を行なった結果は以下の通りである。

	礦	鑛
a.	1	2
b.	2	3
c.	1	×
d.	1	×

- e. 1 ×
 f. 1 ×
 g. 1 2

ここでは a『広韻』, b『集韻』, g『五音集韻』が『蒙古字韻』の収録順位に一致しており, c~f は見出し字として「鑿」を収録していない。a, b, g が比較的似た状況を示すのは、『五音集韻』がもともと『広韻』と『集韻』を材料として構成されていることによるのであろう。また, c~f が互いに似た状況にあるのも, これらが全て『礼部韻略』の系列に属する韻書であることが関係していると思われる。

次に平声の「公功工攻觥觥肱玕玕」9字であるが, 諸資料ではこれらのうち最初の4字「公功工攻」と最後の2字「玕玕」が東韻, 「觥觥」が庚韻, 「肱」が登韻に属する。中古から近世に至る音韻変化の結果, これらの韻が部分的に合流したものである。また, 「玕玕」2字は義注が付されているのみならず, その出現位置(東韻の同一小韻に所属する他の字から分離している)によっても増加字であることは明らかである。

諸資料における当該小韻での各字の出現順位は以下の通りである。来源がまちまちなので, 区切りの斜線と韻目を示した。⁸⁾

	公	功	工	攻	觥	觥	肱	玕	玕
a.	東1	2	3	9	/庚2	1	/登1	/東[10]	[6]
b.	東1	5	3	9	/庚2	1	/登3	/東[8]	[12]
c.	東1	2	3	4	/庚1	×	/登1	/東[5]	[7]
d.	東1	2	4	5	/庚1	2	/登1	/東[6]	[8]
e.	東1	3	2	4	/庚1	×	/登1	/東[5]	[7]
f.	東1	3	2	4	/庚1	×	/蒸1	/東[5]	[7]
g.	東1	3	6	16	/庚2	1	/登1	/東[17]	[10]

まず, 東韻所属字のうち「玕玕」2字を増加字として除外し, 他の4字について見ると, 『蒙古字韻』と同様の出現順位を示すものは a『広韻』, c『附積文互註礼部韻略』, d『増修互註礼部韻略』, 9『五音集韻』である。庚韻の「觥觥」では d『増修互註礼部韻略』のみが『蒙古字韻』と一致し, 『五音集韻』は一致していない。残る「肱」は1字のみであるから, 検討の対象にならない。

以上, guŋ の下に収録される18字(うち3字は増加字)の配列について諸資料との比較を試みた。部分的な不一致はあるものの, 総合的にはやはり『五音集韻』が『蒙古字韻』と最も近いと言える。

そこで今度は比較対象を『五音集韻』に限って, 他の部分についても同様の作業を行なった結果を示すことにする。ただし, 紙幅の関係により, 15の韻部のうち最初の一東の部についての状況だけを示す。また, 漢字は省略し, 韻目と当該小韻内の出現順位を表わす数字のみを掲げることとする。guŋ については上に見たので, それに続く部分を挙げると, 以下の通りである。(下線部は『蒙古字韻』と『五音集韻』で出現順位が前後する部分。)

k'uŋ (平) 東 1 2 3 7 [9]
 (上) 董 1 3 5
 (去) 送 1 4 5 3

duŋ (平) 東 1 13/冬 1/東 12/冬 [9]
 (上) 董 1 2 5 8
 (去) 送 2 3

t'uŋ (平) 東 1 4 [3]
 (上) 董 4 2
 (去) 送 1/宋 1

tuŋ (平) 東 1 2 3 5 6 7 16 17(?) 17 21 24 38 20 42 8 23 28 35/冬 1 24 10 12 5
 (上) 董 1 10
 [去] ⁹⁾送 2 8

nuŋ (平) 冬 1 9 14 16

dʒuŋ (平) 東(知)¹⁰⁾1 4 5/鍾/1 2 4/東(照)1 11
 (上) 腫(知)1 2/腫(照)1 2 4
 (去) 送(知)1 2/用 1/送(照)1/用 2

tʂ'uŋ (平) 東(徹)1/東(穿)1 2 4 3/鍾(徹)2/鍾(穿)2 1 3 4
 (上) 腫 1

tʂuŋ (平) 東 1 2

ñuŋ (平) 鍾 1 3 5 6

buŋ (上) 董 1 5

puŋ (平) 東 1 12 1(?) 6 10 13
 (上) 董 3
 (去) ×

muŋ (平) 東 1 2 3 7 8 21 20 27/庚 18 22 15 1 5 7 8
 (上) 董 1 7 13/梗 1 5
 (去) 送 3(宋 2?)/諍 1 6/宋 1/嶝 1

hũuŋ (平) 東(非)1 5/東(敷)1 3 6/鍾(非)1 7/鍾(敷)1 3 5 12 16 20 21
 (上) 腫(非)1/腫(敷)1
 (去) 送(非)1 2/送(敷)1/用 1

fũuŋ (平) 東 1 6/鍾 1 2 10
 (上) 腫 1
 (去) 送 1/用 1 3 4

wuŋ (平) 東 1 3 6
 (去) 送 1 3 4

dzuŋ (平) 東 2 4 6 14 10 11 9/冬 1

(上) 董 1 2 3 20 7 29 30
 (去) 送 1 2 4/宋 1 2
 ts'uŋ (平) 東 1 [14] [8] 3 4 9 15
 (去) 送 1 2
 tsuŋ (平) 東 1 2 3 6/冬 2 3 5 1
 suŋ (平) 冬 1
 (去) 宋 1/送 1
 šuŋ (平) 鍾 1 6 ×
 žuŋ (平) 鍾 3
 (上) 腫 1
 huŋ (平) 庚 9 19 1/登 1
 ɣuŋ (平) 東 1 5 6 7 10 12 17 19/庚 38 39 41 43 1 3 6 14 22/登 1 2 4
 (上) 董 1/梗 1
 (去) 送 1 3 5/諍 3
 'uŋ (平) 東 1
 (上) 董 1 2
 (去) 送 1 2 4
 luŋ (平) 東 1 6 11 13 16 23 24 18
 (上) 董 6 7
 (去) 送 1
 geuŋ (平) 東 1 2 3 6 5/鍾 1 2 3 7
 (上) 腫 1 8 5 10 23/靜 2 7
 (去) 用 1
 k'euŋ (平) 東 1 7/鍾 1
 (上) 腫 1
 (去) 送 3 2 6/用 1
 keuŋ (平) 東 1 2 4/鍾 1 3 8 14
 (去) 用 1
 tšeuŋ (平) 東 1 2 4/鍾 1/東 3
 (上) 腫 1
 (去) 送 1/用 1
 dzeuŋ (平) 鍾 1 4
 (去) 用 2 1
 tš'euŋ (平) 鍾 1
 tseuŋ (平) 鍾 1
 (去) 用 1

seuŋ (平) 東 1 3 4 7 8/清 1 3
 (上) 腫 1 3 8

zeuŋ (平) 鍾 1
 (去) 用 1 3 4

heuŋ (平) 鍾 1 3 12 17 7 10
 (去) 勁 1

ʼeuŋ (平) 鍾 2[15][9] 1 4 22 18 8
 (上) 腫 1 6
 (去) 用 1 3 10(?) 12 ×

ʼeuŋ (平) 鍾 1 4/清 1
 (上) 靜 1
 (去) 勁 1 2 4 × × 5

yeuŋ (平) 清 1

jeuŋ (平) 東 2(?) 2 7 4 6/鍾 1 2 4 10 14 15 17 18 24 29/清 1 3 11 10
 (上) 腫 6 4 1 7 14/靜 1(?) /腫 21/靜 2
 (去) 用 1

leuŋ (平) 東 1 2 7 8/鍾 1
 (上) 腫 1 2

zeuŋ (平) 東 1 3 5 9 11
 (上) 腫 1 6

結果は以上のようなものであり、偶然とは見なしがたい多くの一致が得られたとともに、少なからぬ不一致箇所もある。不一致箇所の生じる理由としては、次のようないくつかの可能性が考えられる。

その1として、現存の『蒙古字韻』写本に義注の付されたもの以外にもまだ増加字のある可能性。例えば、上の表の中で、**duŋ** の東 12 や **džuŋ** の用 2、あるいは **tʃeuŋ** の東 3 などは、その出現位置から考えて増加字である可能性が極めて高い。

その2として、写本に誤写のある可能性。表の中で、字形に問題ありとして「?」を付したもののや、『五音集韻』に見えず「×」とした箇所はいずれも誤写(ないし所拠版本の段階での誤刻)と思われるものである。現存の『蒙古字韻』写本がパスパ字部分と漢字部分とを問わず多くの誤写を含んでいることはよく知られている。それらは服部四郎 1946, 照那斯図・楊耐思 1987, 花登正宏 1990 などにおいて校訂の対象となっているが、上に掲げた表では、不確実なものについては収録字に関する校訂をあえておこなっていない。

その3として、今回用いた『五音集韻』が原本『蒙古字韻』の拠った『五音集韻』と内容の異なっていた可能性。今回用いたのは前述のように東洋文庫蔵の元至元己丑(1289)刊本である。原本『蒙古字韻』はその目的より推して、パスパ字の公布(1269)とほぼ時を同じくして成ったであろうから、仮に『五音集韻』を利用したとしても、至元己丑(1289)刊本では

あり得ず、より古い(おそらくは金代の)ものに拠ったと考えられる。明代の刊本(例えば内閣文庫蔵明万曆己丑(1589)刊本)を見ると、元刊本とは収録字の順次がかなり異なっており、同様の状況が元刊本と金刊本の間にもなかったとはいえない。すでにふれたように、『五音集韻』は『広韻』と『集韻』を材料として構成されているが、より正確には、まず『広韻』の字を収録し、『広韻』にない字を『集韻』から補って収録しているのである。その際、収録字とともに義注もそれぞれの書から採用されるので、義注を見ればいずれの書から採用された字か一目瞭然である。また、収録字はもとの書における順次をそのまま保つのが原則である。上の表において、**geuŋ** の上声は「腫 1 8 5 10 23」とあり、第2字と第3字の順次が前後しているが、これらの来源たる『広韻』(義注によって『広韻』と知れる)によるならば、この部分は「1 3 4 7 17」となり、『蒙古字韻』と一致する。原本『五音集韻』が『広韻』のような配列であった可能性は小さくないと思われる。その場合、元刊本ではなぜ収録字の順次を改めたかということが問題になるが、その理由は不明である。ただ、元刊本と明刊本の間でも収録字の順次が大きく改められていることを考慮すれば、金刊本と元刊本にも同様の状況があった可能性は否定できないと思われる。『広韻』の段階にまでさかのぼれば『蒙古字韻』と順次が一致するような例はほかにもいくつか見られる。

以上述べたような種々の可能性を考慮するならば、『蒙古字韻』と『五音集韻』は収録字の配列においてもかなりの類似を示すと言い得るであろう。

5. おわりに

『蒙古字韻』と『五音集韻』が小韻(ないし音節)の配列、東送屋尤の各韻における微母の扱い、そして収録字の配列において、それぞれ一致もしくは類似を示したことから、『蒙古字韻』は『五音集韻』を基礎資料として利用したと仮定できる。この仮定が有効であるならば、我々はパスパ字という音韻資料の扱い方を考えなおす必要に迫られるであろう。なぜなら、『蒙古字韻』の成立とパスパ字の漢語表記法の確立とは決して無関係とは思われないからである。

これまで、『蒙古字韻』およびパスパ字漢語表記の基づくところは南方音であるというのが、とりわけ日本での有力な考え方であった。それには服部四郎 1946 の影響が大きいであろうが、それに加えて『蒙古字韻』およびパスパ字表記の声母体系の中にいわゆる「濁音」が範疇として存在することも根拠のひとつとなっていた。実のところ、パスパ字表記それ自体に即して言うならば、その範疇は必ずしも「有声音」を表現しているとは限らないのだが、伝統的な「濁音」に相当する範疇が独立していることが南方音説には有利であった。しかし、『蒙古字韻』の成立に『五音集韻』が関わっている——つまりパスパ字の漢語表記の確立にも『五音集韻』が関わっている——という仮定が認められるならば、いわゆる「濁音」の部分は『五音集韻』の声母体系を参考にして作られたものである可能性もあるわけである。「濁音」は南方では主に声母において独立した範疇として認識されていたであろうが、北方においても平声や上声では声調面において十分に弁別可能な範疇であった。したがって、

『五音集韻』の「濁音」を規範として受け入れることは、たとえ北方音に基づいても困難なことであったとは思われない。韻母よりも声母に関して伝統的な規範意識がはたらくことは、宋元の韻図がいずれも伝統的な声母体系を守っている点からも想像される。

当時の社会的背景から考えても、モンゴル人たちが実際に接した漢語が北方語であったことは議論の余地がない。そしてパスパ字の漢語表記は単に漢語の文章にのみ用いられたのではなく、パスパ字蒙古文の中にも官職名や人名として頻繁に用いられたのである。もし、パスパ字漢語表記の基づくところが北方音にあらずして南方音であったとすれば、モンゴル人たちは自らの役所名や官職名を耳にしたこともない南方音で表記していたことになるが、それは到底信じ難いことである。

とはいえ、個々のパスパ字表記に関する検討を十分に行っていない今の段階では、この問題について結論を出すのは時期尚早であろう。ただ『五音集韻』との関係が問題解決の重要な糸口となりうることを指摘するにとどめておく。

<注>

- 1) この問題については、近く刊行される別稿「『蒙古字韻』と『古今韻会举要』」（『富山大学人文学部紀要』第20号）で詳しく論じている。
- 2) 『蒙古字韻』と『五音集韻』の小韻の配列が一致することは、水谷誠 1980 でも簡単に触れられている。
- 3) **wuw** は実際には誤って **k'uw** と記されているが、服部四郎 1946 および照那斯図・楊耐思 1987 の校訂に従い **wuw** とする。
- 4) ここで『切韻指掌図』を参考にしたのは、唇音の幫滂並明と非敷奉微が別置されていて、明母か微母かの識別が容易だからである。他の韻図では、幫滂並明と非敷奉微が転図における位置を共有しているので、その配置から明母か微母かを決定するのは難しい。なお、『切韻指掌図』では「謀」は明母 1 等に置かれており、すでに直音化していたことが窺われる。「蒼」「膠」「目」は明母 3 等に配されている。
- 5) 現存の『蒙古字韻』写本では、本文の後に「廻避字様」と称するものが添えられている。公文書で回避すべき漢字を列挙したものらしいが、常用字も多く含まれており、当時どの程度の効力があったものかは不明である。また、前半部分に欠落があるが、『元典章』28 礼部にもほぼ同一のものが掲げられているので参照できる。
- 6) 吉池氏の調査により、義注は『礼部韻略』の増訂本のひとつである『増修校正押韻積疑』（1264）によっているらしいことが分かっている。
- 7) 写本では「鷓」とあるが、他の資料にこの字体はなく、「鷓」の誤写と思われる。
- 8) 『古今韻会举要』の韻目は実際には番号で示される。ただし、その番号の下に伝統的な韻目も注記されているので、暫時それにしたがって韻目を記すことにする。
- 9) 写本ではこの箇所声調を示す「去」が記されていない。照那斯図・楊耐思 1987 の校訂によって補う。

10) パスパ字 dʒ-で記される声母は『五音集韻』では知母と照母の二母に相当する。『蒙古字韻』の同一音節の中に知母由来の字と照母由来の字の双方が含まれる場合に限り、韻目の外に字母も記して混同を防ぐことにする。徹母と穿母、および非母と敷母も同様。

〈文献目録〉

- Cheng, Tsai-Fa 1985. Ancient Chinese and Early Mandarin. Journal of Chinese Linguistics Monograph series, 2. Berkeley: University of California at Berkeley.
- 遠藤光暁 1990. 「在欧のいくつかの中国語音韻史資料について」, 『開篇』Vol. 7, 25—44 頁。好文出版。
- 花登正宏 1990. 「《蒙古字韻校本・校勘記》校補」, 『東北大学文学部研究年報』第 39 号, 208—216 頁。
- 橋本萬太郎 1966. 「中世中国語子音のパスパ文字転写」, 『中研談話会報』第 8 号。大阪市立大学文学部中国学研究室。
- 橋本萬太郎 1968. 「発思巴文母音転写の一問題」, 『人文研究』19-10, 786—797 頁。大阪市立大学。
- 橋本萬太郎 1971. 「ブリテン博物館蔵旧抄本蒙古字韻雑記」, 『通信』第 14 号, 1—4 頁。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- Hashimoto, Mantaro J. 1978. hP'ags-pa Chinese (文字と言語研究資料 1). 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 服部四郎 1946. 『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』。東京:文求堂。
- 服部四郎 1984a. 『パクパ字(八思巴字)について—特に e の字と è の字に関して(一)—』, 『言語』Vol. 13, No. 7, 100—104 頁。
- 服部四郎 1984b. 「パクパ字(八思巴字)について—特に e の字と è の字に関して(二)—」, 『言語』Vol. 13, No. 8, 116—121 頁。
- 服部四郎 1985. 「パクパ字(八思巴字)について—再論—」, 『言語』Vol. 14, No. 1, 238—239 頁。
- 平山久雄 1967. 「唐代音韻史に於ける軽唇音化の問題」, 『北海道大学文学部紀要』15-2, 184—240 頁。
- 関西大学東西学術研究所 1956. 『影印大英博物館蔵旧抄本蒙古字韻二卷』。同研究所。
- 慶谷寿信 1965. 「入声韻尾消失の過程についての一仮説 —『蒙古字韻』からのアプローチ—」, 『名古屋大学文学部研究論集』XXXVII, 149—185 頁。
- 龍果夫 1959. 『八思巴字与古漢語』(唐虞訳)。北京:科学出版社。
- 羅常培 1959. 「論龍果夫的《八思巴字和古官話》」, 『中国語文』12 月号, 575—581 頁。
- 羅常培・蔡美彪 1959. 『八思巴字与元代漢語』。北京:科学出版社。
- 水谷誠 1980. 「『五音集韻』について」, 『早稲田大学研究科紀要別冊』第 6 集, 119—149 頁。
- 水谷誠 1983. 「『五音集韻』における『広韻』と相違する反切用字について」, 『中京大学教養

- 論叢』第 23 卷第 4 号, 79—103 頁。
- 中野美代子 1964. 「蒙古字韻の研究—音韻史的考察—」, 『外国語外国文学研究』第 11 号, 15—37 頁。北海道大学。
- Nakano, Miyoko. 1971. A Phonological Study in the 'Phags-pa Script and the Meng-ku Tzu-yün. Oriental Monograph Series, 7. Canberra: The Australian National University Press.
- 尾崎雄二郎 1962. 「大英博物館本蒙古字韻札記」, 『人文』第 8 集, 162—180 頁。京都大学教養部。また『中国語音韻史の研究』167—183 頁。東京: 創文社(1980)。
- Pulleyblank, Edwin G. 1970. Notes on the hP'ags-pa alphabet for Chinese. W.B. Henning Memorial Volume, pp. 358-375. London: Lund Humphries.
- 楊耐思 1959. 「八思巴字対音」, 『中国語文』12 月号, 582—584, 587 頁。
- 楊耐思 1984. 「漢語影, 幺, 魚, 喻的八思巴字訳音」, 『中国民族古文字研究』, 393—406 頁。北京: 中国社会科学出版社。
- 吉池孝一 1993. 「『蒙古字韻』の増補部分について」, 『語学研究』第 72 号, 17—31 頁。拓殖大学外国語学部。
- 照那斯図・楊耐思 1987. 『蒙古字韻校本』。北京: 民族出版社。
- 照那斯図 1990—1991. 『八思巴字和蒙古語文献』I・II。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 張衛東 1983. 「試論八思巴字的冠 h 韵母」, 『民族語文』第 6 期, 39—42 頁。
- 鄭再發 1965. 『蒙古字韻跟八思巴字有關的韻書』。台北: 国立台湾大学文学院。
- 鄭再發 1967. 「八思巴字標註漢語材料校勘記」, 『慶祝李濟先生七十歲論文集』下冊, 933—1003 頁